わが子の声を受け止めて

性的マイノリティの子をもつ父母の手記

FTM 5編、MTF 1編、FTX 1編、
レズビアン 1編、ゲイ 3編
わが子の悩みに寄り添い、悩み、
歩みはじめた親たち

平成26年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策政策研究事業
個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究
研究代表者：日高庸晴（宝塚大学看護学部 教授）　http://health-issue.jp/

だれもが通過する「学校」という場所で、深く傷つく子どもたちがいます。

現在、多くの先生方が、同性愛や性同一性障害といった言葉をメディア等で耳にされたことがあると思います。

しかし、こうした情報がありながら、人口の3〜5%とも言われる性的マイノリティの存在を、教室の子どもたちに当てはめた場合、クラスに1〜2人は存在するかもしれないということに思いいたる先生方はあまりにも少ないようです。

同性愛の子どもは、「異性を好きになることがあたりまえ」という異性愛が自明視される社会で、同性を好きになる自分に気づきます。ゲイ・バイセクシュアル男性は平均年齢13歳のときに「ゲイであることをなんとなく自覚」していますが、そのことを誰にも言えずに過ごしている場合が大半です。

また、学校では男か女のどちらかに区別される場面が数多くあります。そのたびに性同一性障害の子どもは苦痛を感じています。本当の自分のことを言えない、理解されないであろうという心的葛藤に加え、第二次性徴の時期に自分が望まない身体に変化していくことに、絶望すら感じています。

そうした子どもたちが一日の多くを過ごす学校という場で、さらに決定的な影響を受けるのが先生の一言であり、態度であると言えるでしょう。性的マイノリティ当事者に学校時代を振り返ってもらったところ、恋愛や性もフランクに語る生徒に人気のある先生だったが、男女間限定のストーリーだったり、性的マイノリティを嘲笑したりすることもあり、自分を否定されたように感じた等、さまざまな経験談も寄せられています。

生きづらさを抱える性的マイノリティ。
学校が自尊感情を高められる場所に。

性的マイノリティの子どもたちは、異端視、否定、揶揄や嫌悪の対象となる経験率がとても高いことが、国内外の調査等で明らかになっています。

ゲイ・バイセクシュアル男性はメンタルヘルスが悪いこと(抑うつや不安傾向が他集団より顕著)、自殺未遂率が高いこと、アルコールや薬物の使用について報告されていますが、学校時代以来のいじめ被害経験やマイノリティへの社会的抑圧が背後にあるのではないかと分析されています*。

また現在、日本の新規HIV/AIDS報告数の約7割は男性同性間の性的接触によるものですが、人口比に対してこの高い割合の背後にも、たんなる知識の不足以上に、セックス依存や対人関係等、メンタルに起因する課題があると考えられています。

だれもが通過する学校という場で、早い時期から人間の(性を含む)多様性について肯定的なメッセージを受け取り、それを内面化することは、性的マイノリティの子どもたちの自尊感情や自己肯定感を高め、あわせてすべての子どもたちの人権感覚を育てる貴重なきっかけとなることでしょう**。

この小冊子には、わが子から性的マイノリティであることを告げられた親たちの体験を収めました。とまどいながらもわが子を受け入れていった親たちの言葉の背後には、「もし、あのとき先生が……」「あのとき学校が……」という思いがにじんでいるように思われます。

この小冊子を手にしてくださった今日から、みなさん一人ひとりが学校と性的マイノリティとの関係を変えるために立ち上がってくださることを願ってやみません。

宝塚大学看護学部 日高庸晴

*厚生労働省エイズ対策研究推進事業
ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2
http://www.j-msm.com/report/report02/index.html
**厚生労働省エイズ対策政策研究事業
子どもの“人生を変える”先生の言葉があります。
http://health-issue.jp/f/

story 1 FTM

女性の身体で生まれたが、
男性自認をもち、
男性として生きたい人

修学旅行に「絶対、行かない」と言った子

子どもがGIDと知ったのは高校2年のとき。突然本人から手紙をもらい、告げられました。

17年もの間、一人で悩み苦しんできたのかと思うと、涙が溢れてきて、今までそうとも知らず傷つけるようなことをずいぶん言ってしまったと、自分を責めました。

本人から告げられて、あのときのことはそういう理由だったのかということはたくさんありましたが、中学の修学旅行で前日まで準備をしていたのに、朝になると「絶対、行かない」と布団から出てこなくなり、担任と友人が自宅まで迎えにきて、半ば強引に連れていったことがありました。性別への違和から、みんなとの入浴が苦痛だったのかもしれません。

高校に入学し、水泳の授業はなにかと理由をつけて休んでいました。スカートで通学すること、トイレや着替えなど、他にも毎日相当につらいことがたくさんあったでしょう。

中学・高校と相談できる環境と先生がいれば、どんなによかっただろうと思います。

GIDに関して、子どもたちをはじめ、教師も親も、知識を得られる機会を設けてほしいと思います。小学校〜高校と成長するにつれ子どもの感じ方も変わると思うので、段階段階でくり返し学んでほしいです。私自身、初めてミーティングに参加し、当事者とそのご家族の声を実際にお聞きし、胸にグッとくるものがありましたので、子どもたちはなおさら心に残り、理解するだろうと思います。学校にはかならず相談窓口があり、教師全員が正しい知識をもっていれば、子どもたちの苦しみも減らすことができると思います。

現在、大学4年の「娘」は就活中ですが、職場でもどう受け入れていいのかわからないようで、社会の偏見・差別はたいへん厳しいのが現実です。一日も早く、教育の現場で始めていただきたいと切に願います。　（FTMの母　40代）

GID：
Gender identity disorder
性同一性障害の略。法律にも採用された名称で広く普及しているが、当事者のなかには「自分は障害ではない、治療を望んでいるわけではない」として、この言葉を避ける人もいる。近年、「性別違和」の表現も使用されている。

ミーティング：
性的マイノリティの子をもつ親や家族のサポートミーティング。性的マイノリティ当事者も孤立しているが、親もまた孤立し、苦しんでいる。こうしたピアミーティングが、親自身の苦しさを解き、子の受容などに効果を発揮している。

story 2 FTM

女性の身体で生まれたが、
男性自認をもち、
男性として生きたい人

ひそかに苦しんだ ランドセルの赤色

小学校高学年になっても、毎日夕方暗くなるまで男の子たちとつるんで、落とし穴を掘ったり秘密基地を作ったりして遊んでいるような子どもでした。学校から帰るのも男の子たちと一緒で、服や格好は男の子と変わらなくても、ランドセルの色で判断されて、転校生にからかわれたんだそうです。一人だけランドセルの色が赤ですごく目立ったのでしょう。後になって聞いたのですが、いつの間にかランドセルを学校に置いて帰っていたようです。高学年になり窮屈になったせいだと思い込んでいましたが、「女の子の色」である赤が苦痛だったのかもしれません。おそらく先生もこんな事情があったことには気づいていらっしゃらなかったと思います。

小学生時代、そんな風に本人は男の子と一緒につるんでいましたが、中学生にもなると女子・男子と別れてゆき、子どもがずっとやっていたスポーツで少し目立つようになると、それを批判的に言われ、とても悔しくて泣いていたのを覚えています。小学生までは受け入れてくれていた男の子たちがいつの間にか離れていき、陰で悪口を言っていると知ったときのショックは大きいものだったと思います。それを相談したり話したりできる先生がいなかったのは残念です。

（FTMの親　50代）

ランドセルの色：
色使い、スポーツ種目、言葉遣いや振る舞い方等、社会のさまざまな場面で見られる「男らしさ・女らしさ」の押しつけに生きづらさを感じる人は多い。性的マイノリティはより敏感にそれを感じているかもしれない。

story 3 FTM

女性の身体で生まれたが、
男性自認をもち、
男性として生きたい人

思春期の謎がやっと解けた

今から2年前、末娘が23歳を目前にしたときに、「自分は男性である」とカミングアウトしてくれました。当初はびっくりしましたが、今思えば、カミングアウトしてくれたおかげでいろいろな謎が解けたような気がします。

4歳のとき、好きな女の子から「スカートが似合わないね！」と言われたことがきっかけで、その日を境にスカートをまったくはかなくなりました。当時の保育士さんもまったく気がつかなかったそうです。

小学校4年までは活発で天真爛漫な子でしたが、思春期に入り少しずつ変わっていきました。まず5年生で生理が始まり、大好きな水泳を休むようになりました。それも嘘をついてです。当時は体格が良かったものですから、男の子たちからは「お前の足は太いね！」と言われたりして気にしていました。担任もわが子の行動に対してなんの関心もなかったですね！

中学に入ってからが大変でした。クラスメイトと殴り合いのけんかをしたり、「いじめられた！」といって他のクラスの子どもの親から連絡があったと担任から電話があったり、職員室に呼ばれて5人くらいの先生に囲まれ問いつめられたり。

わが子でありながら信じてあげられない時期は辛かったです。

高校では部活中に意識を失い、検査入院しました。左目は視力が低下したため眼科をいくつも回り、原因不明の水晶体の病気であることがわかり、ソフトボールを途中で断念し、マネージャーとして最後まで全うできたのは、担任と部活顧問が親身になってくださったお陰です。

一時は心療内科に通い、安定剤を服用することで本人は安心していましたが、これも部活顧問の配慮で服用しなくても良くなりました。

短大はカトリックの女子大に行きました。大学に行きだしたときはお化粧もしていましたが、2年からは自分が何なのかはっきりしていたらしく、格好も上下スエットといった男性っぽい感じになりました。この時期は楽しかったみたいです。先生も良かったですが、どこまでわが子を理解してくださったのかはわかりません。

わが子のカミングアウトがあるまで、私には正しい知識がありませんでした。現場の教員の方々に正しい知識があれば、救える子どもたちがたくさんいると思います。

F市では小中学校の先生方による性的マイノリティの人権教育が昨年から始まり画期的です！　こうした動きが今の教育現場で着実に進化していくことが、親としての願いです。

（FTMの母　50代）

カミングアウト：
coming out of closet　押し入れから出てくる、という表現に由来。性的マイノリティが自分への偏見に打ち克って、だれかに自分がそうであることを表明すること。自分へのカミングアウト、おなじ仲間と出会う仲間へのカミングアウト、性的マイノリティではない友人や肉親、さらにはメディアなどでのカミングアウトなど、さまざまな局面がある。たんなる「秘密の告白」以上に大きな意味をもつものである。

story 4 FTM

女性の身体で生まれたが、
男性自認をもち、
男性として生きたい人

教育実習での「性教育」でカミングアウト

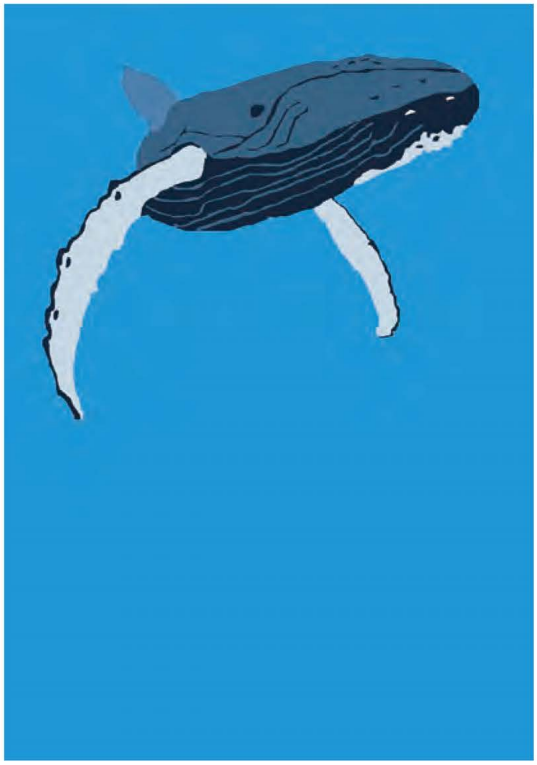
本人が、教育実習に行くときに「男子学生として行きたい」と、大学と受け入れ先の高校（母校）に申し入れました。その時点では性同一性障害の診断書は出ていたものの、ホルモン注射も手術もしていない段階でしたが、大学ではすでにトイレや更衣室などの配慮をしてもらっていました。

しかし、本人が在学していたところは女子大だったので、さすがに男子学生として送り出すことはできないと言われました。それでも高校側に事情を伝えてもらえました。また、受け入れ先の高校には、本人が在学当時にお世話になった先生方がまだ残っておられて、事情を聞いて快く受け入れていただきました。

そして、教育実習最後の日に、クラスの生徒たちだけでしたが、性教育の時間を受け持たせていただき、そこで自分のことを話しました。生徒たちは本人のことを疑いなく男子学生だと思っていたようで、驚きはしたものの、きちんと受け止めてくれたようです。

将来、先生になりたいという希望の第一歩をこうして応援してもらえた経験は、本人にとってなによりも嬉しい後押しになったと思います。

（FTMの父　50代）



story 5 FTM

女性の身体で生まれたが、
男性自認をもち、
男性として生きたい人

学校時代のことは「覚えてない」……

わが家の性同一性障害（FTM）であるNは、幼少期より好奇心旺盛なお転婆で、集団にはなかなか馴染めませんでした。けれども、幼稚園は自由な気風のところに通ったので、明るく屈託なく育ち、楽しい絵や工作をたくさん私にプレゼントしてくれたものです。

ところが、小学校に入ってから様子が変わり、授業参観等で見受けるNの姿はなんとなく意気消沈気味で、表情も固くなりました。

高学年時、街中で同級生とすれ違ったことがあります。相手の女生徒に揶揄気味に声をかけられたNの気まずそうな姿に、学校でのNの居心地の悪さを感じさせられました。

今、昔のことをNにたずねると、「覚えてない」と言います。嫌な記憶は抹消したのか、あるいは自分の世界に没入する子だったから、周りの思惑など眼中になかったのかもしれません。だとしたら、この性格は性的マイノリティのNにとっては良かった。登校渋りもなく、普通に進級して成人し、社会人になったのですから。

けれども、私が家族向けサポートミーティングで多くの当事者たちと出会ううち、なかなかNのようにはいかないということを知りました。まわりのホモフォビックな言動に傷ついて不登校になったり、精神的に病んで言葉が出なくなる子どもだっているのです。

当事者の子どもたちが自分自身を偽ることなく堂々と振る舞えたら、学校生活はどれだけ充実したものになることか。そのためには、親のつぎに近しい大人である先生方の果たす役割は大きい。メディア等の歪んだ情報にさらされている子どもも、正しい知識を持つ教師の言葉で偏見がぬぐわれ、将来に希望が持てるのです。そのためにも教職員は十分な人権意識を培い、さらにLGBTIの基礎知識も最低限持って、クラスに一人や二人はいるであろう性的マイノリティの援護をしてほしい。

願わくば、LGBTIの存在が社会の常識になりますように。まずは教育現場から。

（FTMの母　50代）

ホモフォビック：
同性愛あるいは性的マイノリティに嫌悪的な。

LGBTI：
story 8の注を参照。

story 6 MTF

男性の身体で生まれたが、
女性自認をもち、
女性として生きたい人

「前例がない」「来るな」と教師にも言われて

私のまわりの友人たちから、「性同一性障害・GIDの人がテレビに出るようになって世間の理解が進んだね」――近頃そんな言葉を聞きます。そのたびごとに私は、「まったく理解は進んでないよ！　特に教育現場ではね。多くの教師がGIDを趣味か変態くらいにしか思ってませんよ！」と答えるのが常です。

わが家には、18歳のMTFの子どもがおります。保育所時代からふるまいが女性っぽいため「おかま」とからかわれていましたが、小学校高学年ごろより精神的に不安定になり、中学入学後、早々におかまネタでいじめにあい、数日の登校後より不登校・引きこもりになってしまいました。

中学校では、何度GIDを説明しても「前例がないから」とまったく受け入れてもらえず、GID外来の主治医が来校し、先生方にGIDの説明をしてくれても、たった5人の先生しか聞きに来ません。理解どころか、興味もないのが現実です。生徒指導の教師に至っては、「男か女かわけのわからないものは、登校の必要はない」とさえ言い、強いられた別室登校後、押し出されるように卒業しました。

なんとか入学した定時制高校。ここでは初めからGIDであることを学校側に伝えて入学したものの、こちらがGIDと言うだけで教師陣の心にフィルターがかかるらしく、日頃の何気ない行動にもチェックが入り、「目立たないでください、目立たないでください！」の一点張り。子ども本人にしては居心地の悪さから、休学して今に至ります。

今年4月、あるご縁から職業訓練校に入学。またしてもGIDということを学校側に伝えました。いろんな年代のクラスメイトのなかで、学校側の指示によりカミングアウトをしたところ、みんなに可愛がってもらい、楽しく講義を受けていました。しかし、ある男の先生がGIDに対して絶対に許せないのか、目の敵のように文句をつけてくるので、本人がそれに耐えかね、出席日数を15日残し、退学してしまいました。

学校でも、職業訓練校でも、教える立場にある人がGIDに対し心にフィルターをかけるのは、間違いであると思います。GIDの子どもたちが一人の人として普通に暮らせるように、と願います。

（MTFの母　50代）

いじめ：
性的マイノリティであることを理由に学校時代にいじめ被害経験をした当事者は多い。多くの子どもたちは性的マイノリティを知ったうえで攻撃的行為をしているわけではなく、社会（テレビ）や周囲の大人・教師から刷り込まれた性別観（ジェンダー）に合致しない子を排除しようとしている。旧来のジェンダー観や固定的な性別役割の押しつけを解消していくことも必要だ。

story 7 FTX

Xは特定の性別に規定しないこと

学校外のチャイルドラインに救われた

わが子の息苦しさの記憶は、小学校入学式の日にまでさかのぼる。男子は黒字で、女子は赤字で書かれていたクラス分け表。その日から男女二分の学校生活のなかで、「なんとなくおもしろくない」日々を送っていたと、それから10年以上たってカミングアウト後に知ることができた。小学校時代、体調不良を理由に毎年平均して30日も欠席していたが、不登校の背景にセクシュアリティの問題がひそんでいようなどとは、まわりの誰一人として考えもしなかった。

まわりの同性の子どもたちの輪に入ることができないことを本人は思い悩んでいたのに、担任教師の目には「自分がしっかりあるので周りとつるまず距離を置いている」と映っていたことを、最近出会った元の担任から聞くことができた。

中高生時代は教師らの無知のために、わが子は存在しないものとして扱われてきた。「君たちも経験あるからわかるよね」と、恋愛感情を自分の身に置き換えて理解するよう指導される読解の授業のなかで。「あなたたちもいずれお母さんになるのだから」と、母性を押しつけられる家庭科の授業のなかで……。それらはすべてわが子には当てはまらないものだ。

思い切って相談したスクールカウンセラーには、「まわりに心配かけないように演技をして過ごしておきなさい」と、とどめを刺されている。なぜこんな無知な者がカウンセラーの資格を得ているのかと怒りがこみあげてくる。

自分は生きていけるのだろうかと、悩みの淵からかけたチャイルドラインの電話で、「ちっともおかしいことではないよ。今までよくがんばったね」というキャッチャーさんの一言がわが子を救ってくれたことを知った。このときの子どもの心を思うと、涙があふれ出る。

教員養成課程で正しい知識と意識を身につけることを必修にしなければ、教師の言葉に傷つけられる子どもをなくすことはできないと思っている。

（FTXの親　50代）

チャイルドライン：
18歳までの子どもを対象とした民間ボランティアによる電話相談。日本では「せたがやチャイルドライン」を先駆けに、全国各地にこの名称の電話相談が開設されている。

story 8 レズビアン 女性同性愛者

理科の時間、「中性」と書かれていじめられた

現在30代の娘が自分の性に違和感を覚えていた中学生時代。異性にまったく興味が湧かなかったが、仲間同士の他愛のない会話で、好きな異性やタレントの話に無理に合わせていたこと。幼いころからスカートが苦手だったが、小・中学校とも制服のスカートを着るよりほかなかったこと。中学時代には1歳違いの読書好きな兄と比べられ、スポーツ好きの妹は「○○の弟」とはやしたてられていたこと（男性と見なされた）。リトマス試験紙の学習後には、黒板に「中性」と書かれたことなど、いじめにつながる種々のことがあった様子。

以上のことは26歳でカミングアウトを受けて初めて、親の私が知ったことだ。子どもは親に学校でいじめを受けていることなどはなかなか話さないのが、いじめによる自殺者の報道でわかると思う。

すべて20年近くまえの話だが、現在の学校生活でもそれに近い状況は連綿と続いていると思う。

タレントとして活動するLGBTの人たちには拍手を送るが、身近にその存在を受け入れにくい生徒たちもいると思う。「おかま」「ホモ」などの差別的用語をどこかで聞きつつ育ち、その意識が心の奥のどこかに根づいている可能性はある。私たち親世代がほとんどそんな意識だったから、LGBTのわが子を受け入れるのに時間がかかる親が多いのが現実である。また、カミングアウトを受けて親子・家族ともども悩み続ける方々の存在も多い。私たちのように葛藤を経て応援の立場をとれるようになった親もあるが。

自分の性と向き合い、同じ仲間と出会うまで自分を肯定できず、10年以上苦しみ続けた娘を思うとき、学校でLGBTに関することをまったく学ぶ機会がなかったことが残念でならない。

世間のLGBTに対する理解はしだいに高まってきていると思うが、悩み多い多感な世代の生徒たち、当事者たちが学ぶ機会が必要だと思う。まずは生徒たちに日々接してくださる先生方に、LGBTを人権問題として正しく理解していただきたいと思う。　（レズビアンの母　60代）

タレント：
現在、バラエティ番組等ではいわゆる「オネエタレント」の活躍が見られ、日本が「性的マイノリティに寛容」との例証とされることもある。ただ、女性性を過度に強調したり、「色物」扱いされたりする姿に、当事者のなかにはそれが苦手だと言う人も多い。

LGBT：
レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭文字をとったもの。性的マイノリティの総称として使われる。story 5のようにI（インターセックス）も併記したり、LGBTsとより性の多様性に配慮した表記もある。

story 9 ゲイ 男性同性愛者

右利きも左利きも、LGBTも、みんな子どもの個性

今まで教育現場ではさまざまな問題に取り組んでこられたことと思います。水面下で押し潰されそうになっている子どもたちをぜひ救ってください。特殊なもの、たんなる性的嗜好、奇異、理解を超えたこととして、蓋をしないでください。もし、そういう懸念のある子がいたら、目をそらさず向き合ってください。実感しなくても、クラスに一人くらいいることを自覚して言葉を選んでください。

彼らは、親が彼らのことを慈しんでくれていることが痛いほどわかるだけに、最も身近にいる親には打ち明けられません。どうか、彼らが生活の大半を過ごす学校で、心の拠り所となるような場を作ってください。

LGBTの子どもは、小学校高学年ごろから自分は何者なのか、男と女の二者択一のなかで揺れる自分はなんなのか、もがき苦しみ、自己肯定ができないまま成長していきます。少年期において他者との関わりあいのなかで、犯罪者でもなく、人になんら迷惑をかけるわけでもないのに、蔑まれ、笑われて、傷ついて育っていくことが現状であることをよく認識してください。ひたすら自分を押し殺し、本当の自分の姿を出せずに友人づき合いをしなければならない状況を、心の痛みとともにわかってください。

そのためには教員自身が、ゲイをはじめとするLGBTについてよく学んでください。右利きの子、左利きの子、運動の得意な子、芸術の得意な子……たんなる個性の一つであることを、教育現場で展開してください。今までわが子がお世話になった先生方（親としては、先生に恵まれていたと感謝していますが）のなかで、子どもが自殺まで考えていたとおわかりになる先生は多分いらっしゃらないでしょう。

平等な世界の扉は、教育によって開かれると思っています。LGBTの悩み相談の件数は少ないと言われますが、少ないのではなく、声が挙げられないのです。心の闇は深いのです。先生方の深い洞察によって、差別がなくなることを願っています。

（ゲイの母　50代）

story 10 ゲイ 男性同性愛者

育てば育つほど
自分らしさから遠くなる

息子がカミングアウトしてくれたのは高校生のときでした。

中学生のころに自分がゲイだと気づいたという息子は、自分が死ぬまで恋人もできず結婚もせず、たった一人で生きていくと思うと本当に寂しかった、自殺も考えたことがあった、と言いました。

小学生のころは、みずから進んで家庭科クラブに入るような子でした。友だちにからかわれないのだろうかと心配しながらも、個性的な息子を自慢に思っていました。

けれど中学校で男女にきっぱりと分けられたとき、息子は居場所がなくなったように感じたそうです。男子は女子とは違う、こうあらねば……という考えが、学校ではどんどん強く押しつけられるようになり、できるだけ男っぽく足を開いて座るようにいつも気をつけていたと言います。中学生のころからは、学校から帰るとすぐに寝ていました。成績もどんどん落ちていくばかりで、受験生の時期も部屋を覗くといつも寝ているので、怠惰な息子だと呆れるだけの私でした。けれど、あのころは寝ることでしか自分の苦しみを忘れることができなかった、と後で聞きました。

高校入学直後には、今思えばうつ病の兆候と思えるような行動が担任の先生から報告されていましたが、それでも先生も私も、彼の本当の苦しみに気づくことはできませんでした。

育てば育つほど、自分らしくあることができなくなった息子でした。学校でも家でも、差別的な発言をすぐ横で聞いていたこともあったかもしれません。メディアからも溢れるように流される偏見や差別の言葉や映像の数々。自己肯定感を育むべき思春期を、誰にも話せず、誰からも守られないまま、それらのなかでじっと耐えながら過ごしてきたのです。息子はなんとか生き抜いてきてくれました。でも、もしその半ばで耐え切れなくなっていたら……。

今もなお息子のようにじっと耐えている当事者の子どもたちが、学校にはたくさんいることでしょう。先生方には、彼らを支え守り、だれもが自分らしくあることに誇りを持てるような教育をぜひお願いしたいと思います。　（ゲイの母　60代）

家庭科クラブ：
ゲイにたいして「女性っぽい男性」との誤解は現在も多い。本人の性的指向と男性らしさ・女性らしさというジェンダーとは無関係である。あくまでも本人の個性として認識すべきだろう。

story 11 ゲイ 男性同性愛者

おなじ立場の親たちとの出会いに感謝

あのとき息子は、私に淡々と話をしました。私は黙りこんでしまいました。理解できない。そんなこと、ありえる理由がない。正直言葉が見つかりませんでした。ただ、私の気持ちが完全に崩れていったことを、今もはっきりと覚えています。

受け入れられない。私の夢が消えた。平凡でいい、普通の息子であってほしい。と同時に、息子がかわいそうでたまらなくなっていきました。私は孤独に陥り、黙々とそのことばかりを考える日々になっていきました。驚き、体裁、偏見、息子に対する申し訳なさ。なにがそれほどまでに私の心をしめつけるのか。

私は思い切って姉に相談してみました。「落ち着いて考えてみて」と言われました。「なんでもないことよ。みんな堂々と生きているじゃない。有名な作家の人もそうでしょ。普通だよ。そんなことで悩まないで」。そう言われても、一人、受け入れられない私がいました。

「気持ちはわかるよ。焦らないで。母親でしょ、しっかりして。早く受け入れてあげて。そのことから逃げないで勉強してみたら。なんでも知ることから始まるのよ」。何回励まされたか、聞いてもらったか数えきれません。なんとかしてこの悩む気持ちを卒業しなければ……。

1年が過ぎ、私はある電話相談をきっかけに、同じ立場でありながらそんなことは普通のことだよと言える人びとに巡りあえました。自分のことなのに、本すらも買いに行くことができなかった私。本も送っていただきました。5冊も読み、いろいろなことを知ることができました。

今、同じ個性を持つ子どもさんのお母さん、当事者本人との交流会にまで出かけるようになり、そこでまたたくさんの勇気、優しい気持ち、いろいろな体験談を聞かせていただきながら、この壁を乗り越えようと自分なりに頑張っています。

息子の告白により大切なことをたくさん知ることができました。一人では生きられないこと。息子もきっと私の知らないところで私のようにいろいろな人たちに支えてもらいながら生きてきたに違いないということ。今の私は、支えてくださった皆さんに感謝することだけです。　（ゲイの母　60代）

もっとよく知るために

この冊子は平成26年度厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「個別施策層のインターネットによるモニタリング調査と教育・検査・臨床現場における予防・支援に関する研究」(研究代表者:宝塚大学看護学部　日高庸晴)の一環として制作されました。本研究プロジェクトでは、他にも研究成果を還元するプログラムや教育資材を用意しています。

●教職員、医療関係者(医師、看護師、保健師)、臨床心理士などへ向けての、性的マイノリティに関する研修会、講演会等を実施しています。
●冊子やホームページを通じて、研究成果を還元しています。

1

2

冊子(PDFでダウンロード可)

子どもの"人生を変える"先生の言葉があります。 1
http://health-issue.jp/f/

「あなたになら話せる」その安心がスタートライン 2
http://health-issue.jp/hokenshi_2014_a4_web.pdf

ホームページ

ゲイ・バイセクシュアル男性の健康レポート2
http://www.j-msm.com/report/report02/index.html

ゲイ・バイセクシュアル男性のインターネット調査
REACH Onlineの結果報告(累積研究参加者は5万人を超える)
http://www.gay-report.jp

わが国における都会の若者の自殺未遂率経験割合と
その関連要因に関する研究 ～大阪の繁華街での街頭調査の結果から～
http://health-issue.jp/suicide/

関連情報

つぎの団体でも、ご相談や情報提供に応じています(カッコ内はおもな活動エリア)。

NPO法人SHIP(神奈川)　http://www2.ship-web.com
NPO法人LGBTの家族と友人をつなぐ会(神戸・東京・福岡)　http://lgbt-family.or.jp
性と生を考える会(奈良)　http://say-to-say.com/

つぎのパンフレットは、ダウンロード利用できます。

教職員のためのセクシュアル・マイノリティサポートブック　http://say-to-say.com/file/sb2.pdf

この冊子へのお問い合わせ
〒530-0012 大阪市北区芝田1-13-16
宝塚大学看護学部日高研究室
hidaka-office@takara-univ.ac.jp
この冊子の無断複製および転載をお断りします。
発行：2014年12月
編集：永易至文　デザイン：加納啓善　イラスト：じるじる©